平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

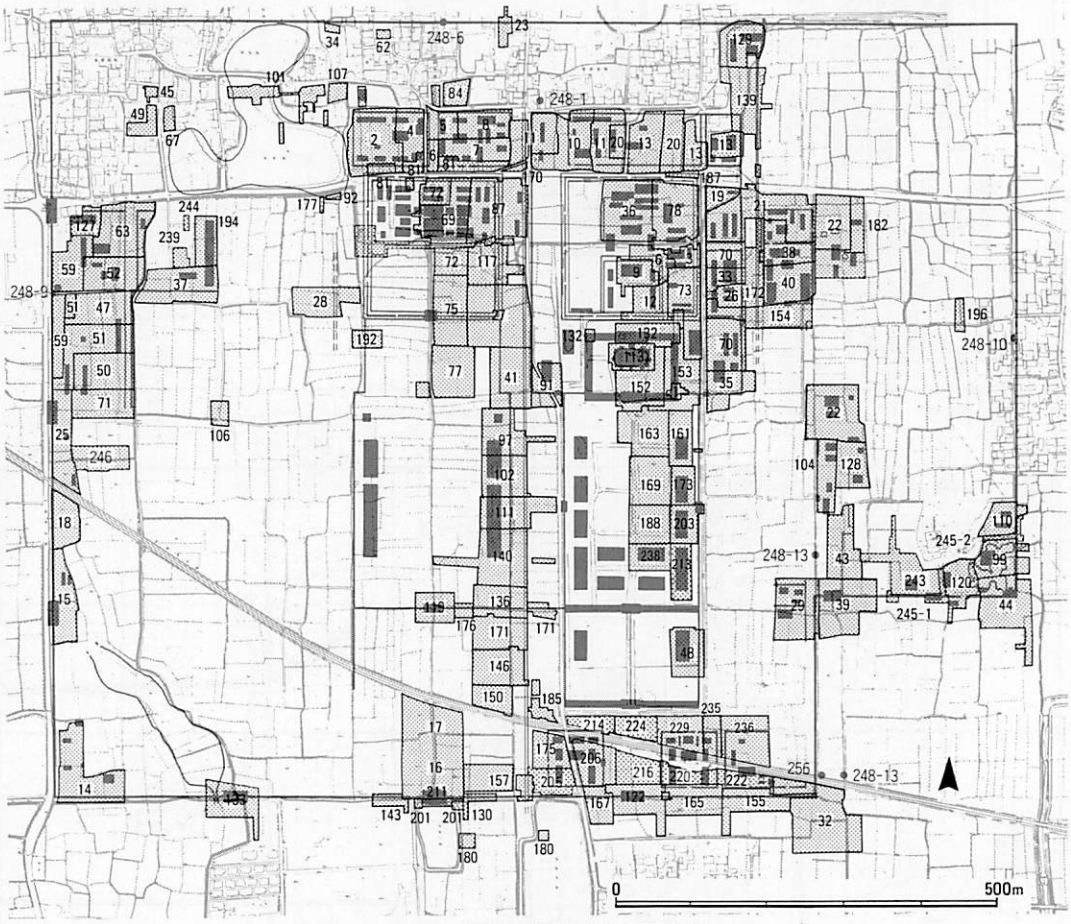
1994年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査は平城宮跡７件、平城京20跡件、京内寺院等２件である。以下に主要な調査の概要を報告する。

1　平城宮跡の調査

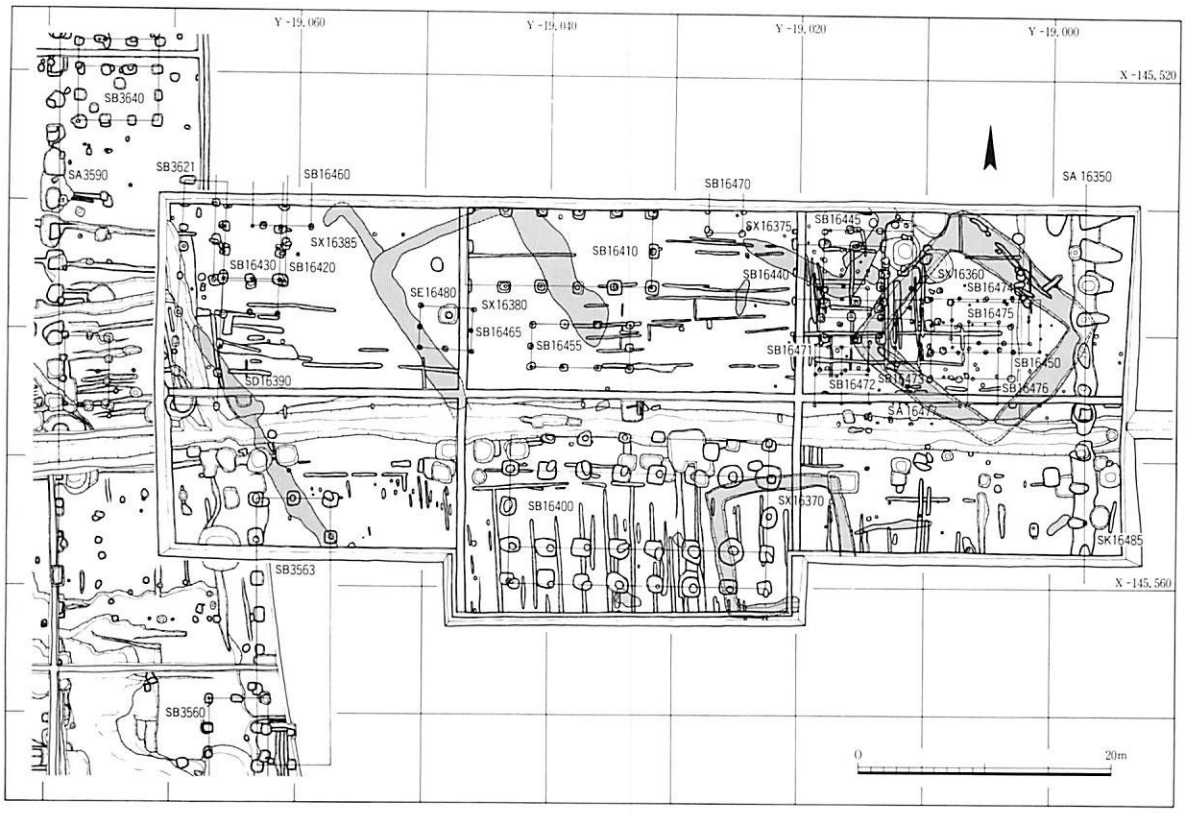
右馬寮の調査（第246次）

佐伯門の北東部、平城宮跡資料館や収蔵庫の建つ一帯は1968～1980年度にかけてほぼ全域の調査を完了し、西面中門である佐伯門から西面北門にかけた広い地区が官馬の調習・飼養を職掌とする馬寮であり、その北半部に正庁部分、南半部には馬房、馬場など飼育・調習の空間を設けていたことが判明している。今回の調査区は佐伯門の南東部、宮内道路の南側である。

調査区東端で検出した柱間９間の南北塀SA16350は幅２ｍ前後、深さ0.9～1.4ｍの布掘りの掘り込み地業を伴う。これは上記馬寮の南北塀SA5950の南の延長上にあたり当該官衙の東を限る施設と考えられる。また、SA5950と柱間および柱根が同規模であることから馬寮と同一の規格で設計されたものと考えられる。東限の南北塀SA16350から西へ120尺の位置を建物心とする掘立柱東西棟建物SB16400は南北両面に廂があり、桁行７間（10尺×７）、梁間４間（10尺×４）の規模を有する。これは馬寮の正殿SB6450と同一規模で位置関係も近似し、SA16350から100大尺という完数性の高い位置にあることから当該官衙の正殿と考えられる。この柱掘形は明らかに重複しており、同位置で建て替えられた



1994年度　平城宮跡内発掘調査位置図（1：10,000）



第246次調査遺構平面図（1：600、左は第25次調査区、アミは弥生時代の遺構）

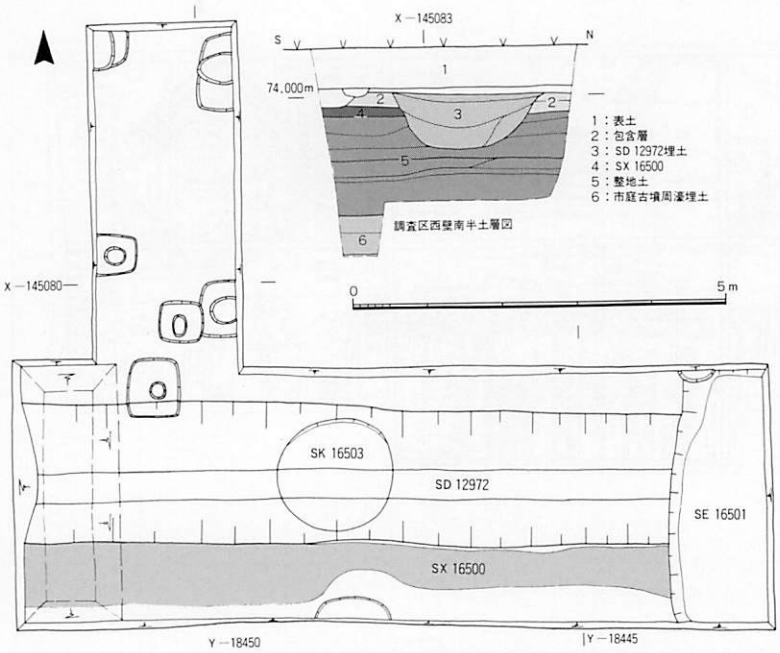
可能性が高い。掘立柱南北棟建物SB3563では第25次調査で西側柱列を検出し、南北塀と認識していたものであるが、今回東側柱列の一部と北妻を検出し、北妻の位置が正殿SB16400の棟通りに一致することが判明した。正殿の東側にこれに対応する建物は存在しないが、西脇殿に相当するものとみられる。掘立柱南北棟建物SB3621も第25次調査で西側柱列を検出し、南北塀と認識していたものであるが、桁行8間（または7間）、梁間1間の建物と判明した。掘立柱東西棟建物SB16410は正殿と軸線が一致しないが、後殿としての性格が想定される。ただし、正殿と併存した確証はなく、ある時期の中心建物の可能性もある。正殿の北には掘立柱東西棟建物SB16455、北西には掘立柱南北棟建物SB16420・SB16430、北東には掘立柱東西棟建物SB16440を配す。掘立柱南北棟建物SB16445はSB16440を建て替えたものであろう。他に掘立柱建物SB16450、SB16460、SB16465、SB16470があり、平安時代に降る可能性がある。平安時代以後の遺構として建物6棟、塀1条、井戸3基、土坑数十基、溝数十条を検出した。また、弥生時代の遺構として方形周溝墓5基のほか、溝と土坑がある。完掘した方形周溝墓SX16360の溝の最下部から弥生時代前期の壷用蓋形土器が出土した。

律令官制では馬寮は左馬寮と右馬寮に分かれており、それが奈良時代の末に主馬寮に一本化されたが平安時代初頭に再び左右の馬寮が置かれた。平安宮では西面南門の内側南北にそれぞれ右馬寮、左馬寮が置かれ広い面積を有していた。平城宮でも平安宮と同様に両馬寮が南北に置かれていたとし、佐伯門北東部の馬寮を左馬寮にあてるとすれば、調査地区が右馬寮の北半部にあたり正殿等の正庁部分が置かれていたことと理解でき、佐伯門の東北部の左馬寮との類似性が増す。今回の調査では遺物から当該官衙名の特定はできなかったが、佐伯門の北東部、佐伯門から西面北門に至る区画を左馬寮、佐伯門の南東部、佐伯門から西面南門である玉手門に至る区画を右馬寮と推断するに至った。

内裏北外郭北方の調査（第248-1次）

住宅改築に伴う事前調査である。調査区は内膳司と推定されている内裏北外郭の北方でこの官衙の

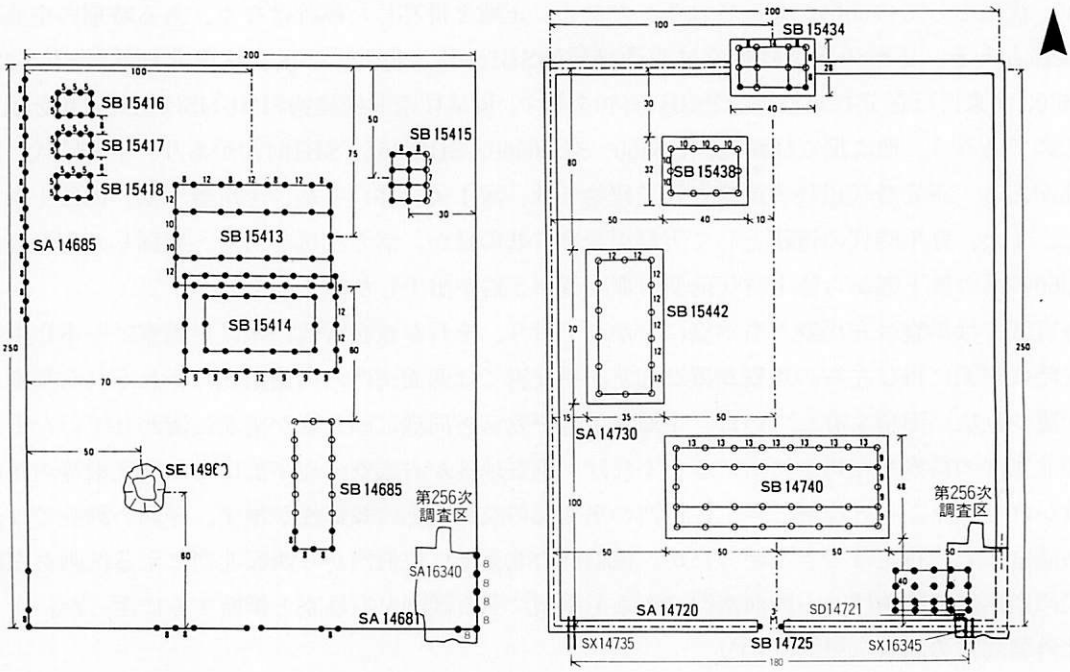
西面築地のさらに西方に位置する。検出した遺構は瓦溜り、東西溝１条および柱穴と近世・近代の井戸である。瓦溜りSX16500からは大量の丸・平瓦と軒丸瓦6304Ｃ１点、軒平瓦6664Ｆ１点、6664Ｋ６点、6721Ｃ１点および面戸瓦１点が出土した。これらは築地の落下瓦とみられ、築地本体は確認できなかったものの、この位置に築地が存在していた可能性が高いことが判明した。これによって、内裏北外郭と第一次大極殿北外郭の両官衙の北面をつなぐ閉塞施設が想定されるようになった。東西溝SD12927は第174-8次調査でも検出し、内裏北外郭の官衙の北面築地雨落溝と想定されていたものであるが、SX16500より新しく、奈良時代の溝の位置を踏襲した後世のものと考えられる。なお、調査区は市庭古墳前方部の西周濠にもあたり、調査区の東端で周濠の底を検出した。



第248-1次調査発掘遺構図、西壁土層図（１：100）

式部省東官衙の調査（第256次）

平城宮跡南辺の東隅を南北に流れる用水路の改修工事に伴う事前調査である。近鉄線の南第222次調査区と第32次補足調査区に挟まれる区域である。遺構は調査区中央の用水路で大きく削平をうけ、その南端の用水による破損は著しい。隣接する近鉄線の北側西方で行った第236次調査などから一帯の様子が明らかになり、今回の調査区は式部省東官衙と仮称される区域の東南隅にあたり、下層遺構が奈



式部省東官衙における建物配置の変化（左：下層、右：上層　1：1,000）（単位：尺）

良時代前半の式部省、上層遺構が奈良時代後半の神祇官と推定されている。遺構は大きくA期、B期の2時期に分かれ、A期は第236次調査のB期、B期は第236次調査のC期にそれぞれ相当する。

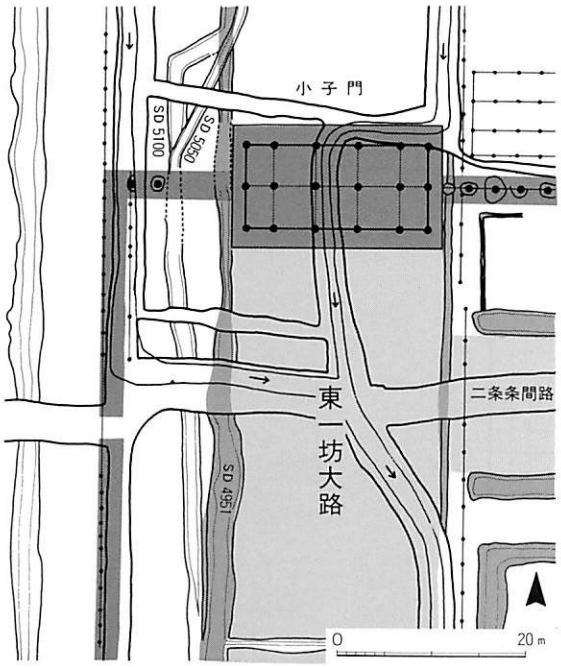
A期　下層遺構に伴う第1次整地層の上面で、下層官衙の南面を限る掘立柱東西塀SA14681の東端1間分（柱間約2.4m）およびこの東側の柱穴から北へ延びる掘立柱南北塀SA16340を4間分（柱間約2.4m）検出した。これにより下層官衙の東南隅が確定し、南面東西塀SA14681の規模は59.2m（200尺）と判明した。

B期　上層遺構に伴う第2次整地層の上面で遺構を検出した。北側石組み雨落溝SD14721と南面築地塀SA14720の下の石組み暗渠SX16345（調査区外に延びる）によって、下層遺構の南面東西塀SA14681の位置を踏襲した上層官衙の南面築地塀SA14720が想定されるが、築地積土は失われ掘込地業も明確ではなかった。他にこの時期の遺構には第222次調査で検出している掘立柱東西棟建物で南廂と床束を伴うSB14750があり、今回その東妻を検出し身舎が梁間2間、桁行4間であることが確定した。SB14750の北側にはその雨落溝があり、北廂の出は1.5mを計る。

今回の調査で下層官衙の規模は確定したが、上層官衙の東面築地塀の遺構は検出されず、位置や方向を間接的に推定できる資料すら得られなかった。上層官衙の東限の検出が今後の課題である。

小子門および東一坊大路の調査（第248-13次）

平城宮東院地域の水路の護岸改修工事に伴う事前調査である。まず、小子門の西側では水路の東壁に直径30cm弱の柱根を伴う柱穴が検出された。小子門の棟通りは東院南面の築地大垣心と一致することが知られているが、この柱穴は門の棟通りにあたる位置で、築地大垣に先行する下層の掘立柱塀のものである。一方、小子門の西から南へ延びる東面大垣の位置はおおよその推定が可能であるが、正確な位置は未確定であった。今回の調査では、検出した柱穴と水路が東に向きを変える屈曲部との間で水路の西側法面に黄橙色の築地の掘り込み地業が認められたことと、掘り込み地業の東端は水路の東端を南北に走ることが判明した。このことから東面大垣心は水路内の西よりの位置と考えられ、柱穴は大垣屈曲部の心にあたるものではなく、わずかに東に位置することになる。第39次調査ではこの柱穴の東隣りにあたる、南面の築地大垣下層の柱根を伴う柱穴が検出されており双方の柱間は約9尺となる。ところで東面大垣の築地の掘り込み地業の認められた水路西側法面では地業の積土の下に柱穴は一切認められなかった。したがって、小子門南の東面大垣については先行する掘立柱塀がなく、当初から築地大垣が造営されたことが明らかとなる大きな成果を得た。次に、水路が再び南流する地点の南で近鉄線までの間では、東一坊大路の東西両側溝の確認を目的とした6ケ所のトレンチを設けた。北側の第1・第2トレンチの間では東一坊大路東側溝にあたる南北溝SD5030の西肩を39mにわたって検出したが、その大半を現水路および近代の水路跡が破壊しており、その溝心を確定することはできなかった。最も南の第6トレンチでは東一坊大路西側溝にあたる南北溝SD4951を検出。その規模は溝幅5.3m、深さ0.8mであることがわかった。なお、注目すべき遺物には小子門の南で出土した軒丸瓦6304Lがある。



平城宮小子門付近の復原（1：800）

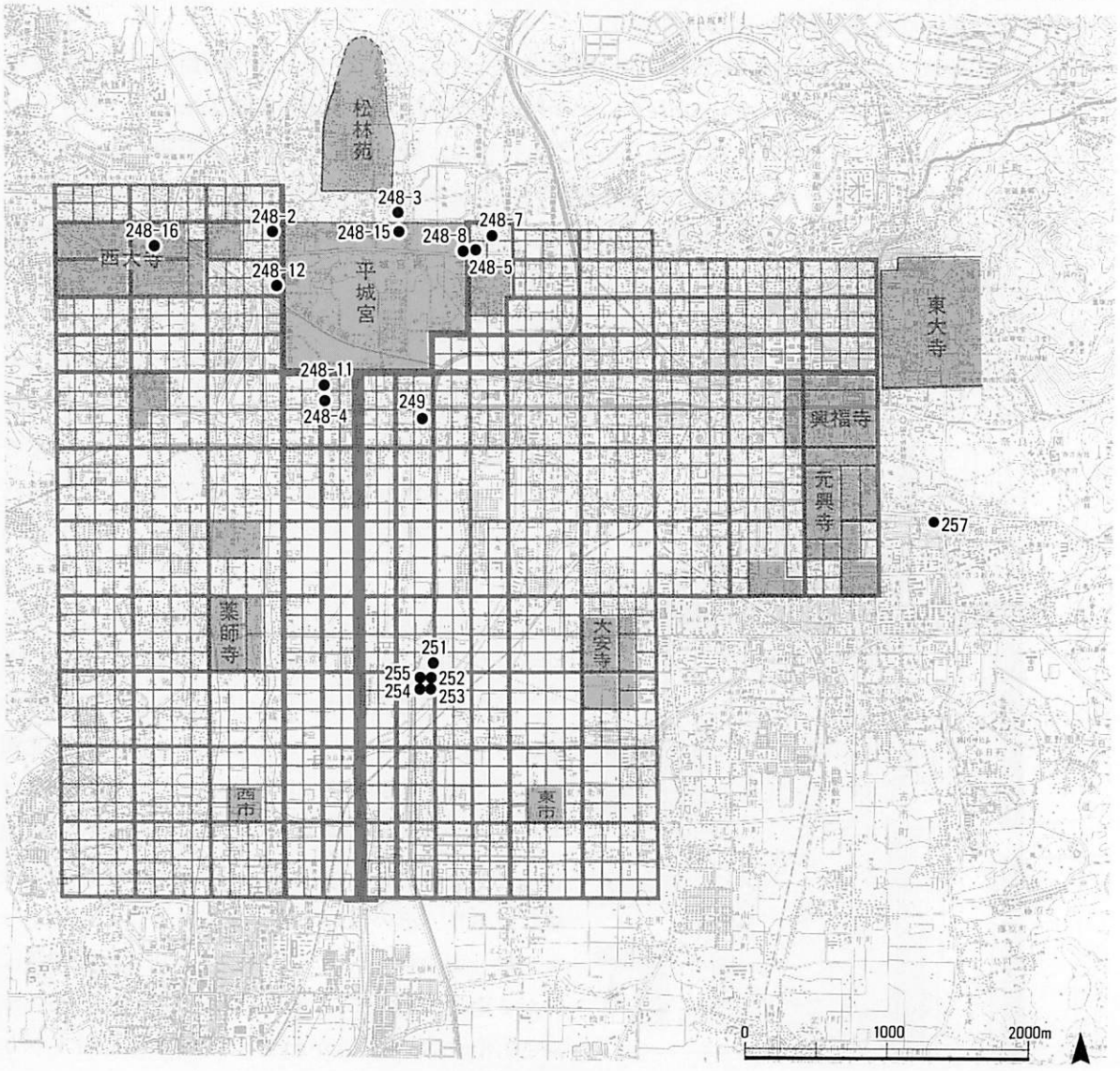
2　平城京跡の調査

左京三条一坊十四坪の調査（第249次）

共同住宅の建設に伴う事前調査である。調査区は左京三条一坊十四坪の北東隅にあたり、同坪の西辺で行った第46次調査から同坪は園池をもつ１坪（以上）占地になる可能性が高いことが指摘されている。検出した遺構は掘立柱建物12棟、掘立柱塀8条、土器埋納遺構1基、土坑2基等で、これらはいずれも奈良時代のものと考えられ、遺構の重複関係、出土遺物等から４時期に区分される。

Ａ期（奈良時代初め）　調査区中央東寄りの２間の南北塀SA5668と２間以上の東西塀SA5669のほかに顕著な遺構は認められない。

Ｂ期（奈良時代前半）　敷地内を掘立柱塀で区画し、その中に南北棟建物2棟が南北に並ぶ。北側の掘立柱建物SB5631は梁間２間、桁行７間で東に廂が付く。この建物の南側の３間分には棟通りに間仕切り用の柱穴が残り、北側４間とは用途が異なっていたと考えられる。南側３間の西側には３間分の南北塀SA5636があり、これは目隠し塀もしくは西側の廂と考えられる。また、南側の掘立柱建物SB5637は西廂を伴うが、建物の北西部のみの検出であるため規模は不明であった。SB5631の北側では掘立柱東西塀SA5641を東西４間分、掘立柱南北塀SA5642を南北2間分検出した。これらはＬ字またはＴ字形に



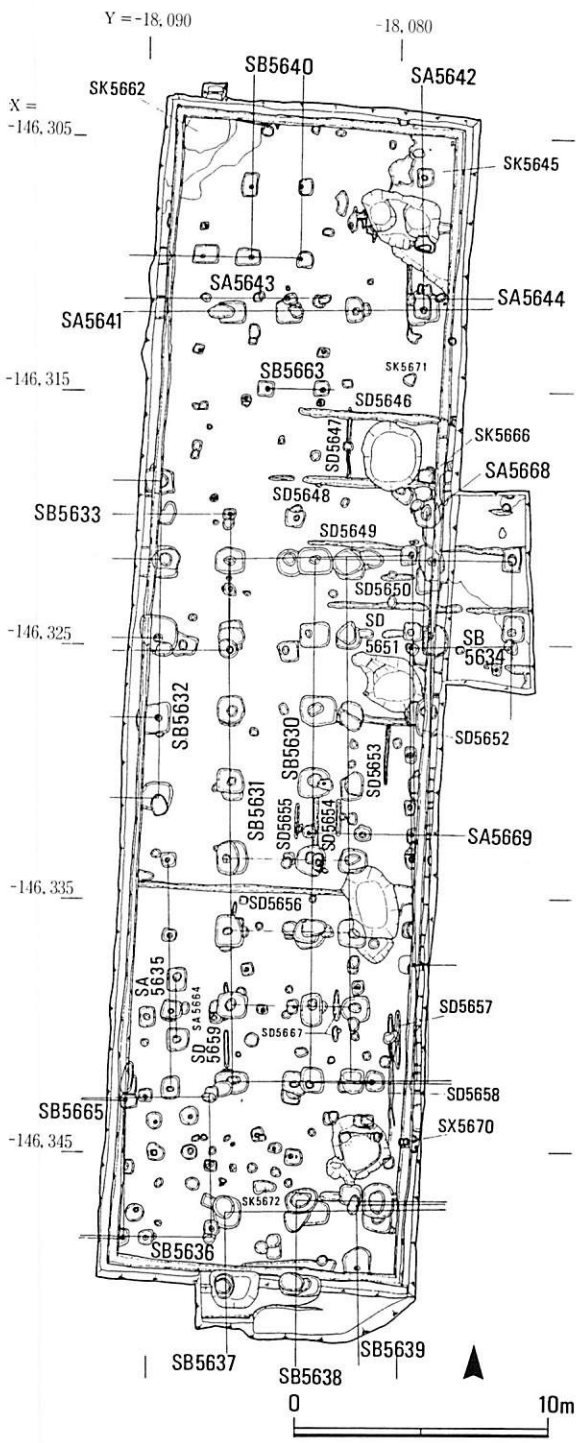
1994年度　平城京・京内寺院等の発掘調査位置図（1：50,000）

つながる塀であろう。SA5641の柱間は９尺であるが、SA5641の東から２間目が８尺と狭いことから、ここが通路になる可能性がある。

Ｃ期（奈良時代後半）　Ｂ期の南北棟２棟を東に寄せて建て替えた配置をとる。北側の掘立柱建物SB5630は梁間２間、桁行７間で東廂を伴う。南側の掘立柱建物SB5638は北西部の一角のみの検出で礎石建物の可能性もある。掘立柱建物SB5632は東妻のみの検出。他に掘立柱東西棟建物SB5665の東妻、掘立柱南北棟建物SB5640の東南部を検出した。築地等の痕跡はないが、SB5663は東西１間（７尺）で東西の築地に開く門の可能性がある。土器埋納遺構SX5670はSB5630とSB5638の中間にあり、須恵器壷Ａ（奈良時代前半）に須恵器皿Ｃを反転させて蓋としたもので、土器内外の土壌資料の分析から銅刀子、墨挺、筆管とともに胎盤を納めた胞衣壷と判明した。

Ｄ期（奈良時代末）　掘立柱南北棟建物SB5634の他、小規模な掘立柱建物が点在する。また、土坑SX5645からは坩堝片、炉壁、鉱滓等の鋳造関係の遺物が出土した。

今回の調査から奈良時代の中頃をはさむＢ、Ｃ期は敷地内を塀等で区画し、建物を整然と配置した様相が明らかになった。坪の中心部等が未調査であるが、坪の北東部は主要施設の置かれた区画の一つであったと推定される。



第249次調査区遺構平面図（1：300）

頭塔の調査（第257次）

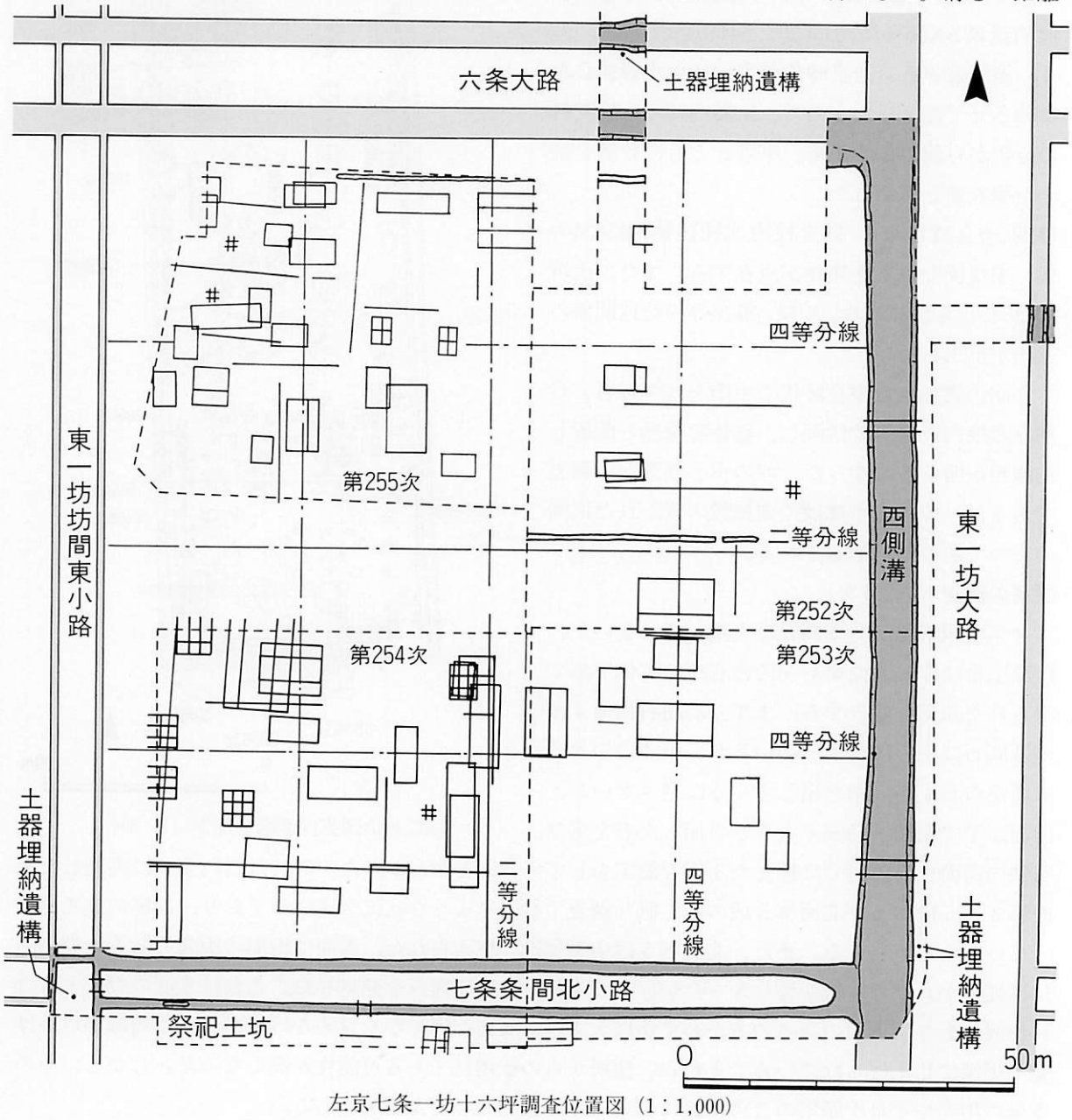
今年度頭塔では発掘調査は実施していないが、復原工事に伴う北面第3～6段の石積の解体工事で得られた知見を報告する。まず、北面石積第４段の基底石は完全に埋まっているか、第３段のテラス面からわずかに頭を出しているに過ぎないが、前面が平で幅50～60cmと大きさの揃った石を選び、石積の前面を真っ直ぐに揃えた丁寧な施工をしていることがわかった。これはこれまでに実施した東面第３・５段および北面第３段の断ち割り調査でも同じような状況を確認しており、同様の施工を行っていると考えられる。また、北面第５段中央付近に据えられた、表面に円形の突起のある大型の石材は従来からその解釈が難しかったが、その裏側に円形の窪みを発見した。これは表面の突起とほぼ同位置にあり、裏面の窪みの方がわずかに大きい。表面だけでなく見えない裏面までも周縁部以外は鑿で平滑に仕上げられていることから、他所からの転用材である可能性が高くなった。しかし、その本来の用途やそれが頭塔のこの位置に据えられた意味はいぜん不明である。

左京七条一坊十六坪の調査（第252・253・254・255次）

大型小売店舗新築に伴う事前調査である。敷地は左京七条一坊十六坪の大部分と六条一坊十三坪、七条一坊十五坪、七条二坊一坪の一部にあたる。敷地面積は約31.500㎡で、このうち七条一坊十六坪を中心とした約14.055㎡を5次に分けて調査した。第251次調査（別項で報告）は東一坊大路上に調査区（約255㎡）を設けた。第252次調査では十六坪の東北部を中心とした調査区（約3.900㎡）で六条大路、東一坊大路の確認のためのトレンチを延ばした。第253次調査では十六坪の東南部を中心とした調査区（約3.730㎡）、第254次調査では十六坪の西南部を中心とした調査区（約3.700㎡）、第255次調査では十六坪の西北部を中心とした調査区（約2.500㎡）をそれぞれ設けた。その結果、十六坪周囲の条坊関係遺構、十六坪のほぼ全容および十五坪の北辺部の様相等が判明した。なお、十六坪内は東北部、東南部、西南部、西北部で様相が異なるため、この順に分けて記述する。

条坊関係遺構

六条大路の南北両側溝を検出したことにより、六条大路の幅員がはじめて判明した。溝心々距離



左京七条一坊十六坪調査位置図（1：1,000）

14.1～14.6mで14.2mとすると40大尺に復原でき、他の大路より狭いことがわかった。六条大路北側溝は幅4～6m、深さ0.8mである。六条大路南側溝は幅4m、深さ0.7mで、溝はほとんど埋没した時点で幅0.7m、深さ0.3mに掘り直している。東一坊大路もその両側溝を検出した。東一坊大路東側溝は幅約3m、深さ0.3mで小規模であることから主として道路の排水を処理したものであろう。一方、東一坊大路西側溝は幅約7.6～8.3m、深さ1.2～1.6mで規模が大きかった。堆積層は奈良時代前半、奈良時代後半、平安時代前半、平安時代後半、平安時代末期の5層に区分でき、溝の廃絶は平安時代末である。奈良時代後半に堆積が進み、平安時代初頭には幅は当初と変わらないものの、深さ50cmになっていた。その後さらに堆積が進み、深さ30cmになった時、平安時代前期の堆積層の上面から幅2.5～3.4m、深さ0.3～0.6mの蛇行した溝を掘削する。平安時代後期に蛇行溝が埋没し、幅約8m、深さ0.2mの浅い溝となり、両岸に入江状の入り込み部分が数ケ所できる。これは第252次調査の南端部で検出した堰とともに溝を水田の用水として利用した時のものと考えられる。さて、七条条間北小路でも南北両側溝を検出し、その規模は七条条間北小路北側溝で幅1.8～2.5m、深さ0.4～0.6m、七条条間北小路南側溝で幅1.4～2m、深さ0.3～0.4m、溝心々距離で約7m、路面幅は5m前後であった。平城京では1町375大尺（450小尺）四方で条坊を計画し、この計画線上に道路心を置くが、六条大路心から375大尺南に位置するのは七条条間北小路の北側溝である。藤原京では条坊計画線上に小路側溝を置き、坪によって両側溝の内のどちらを置くか一定しない方式があった可能性が指摘されているが、平城京でもこの方式を採ったか検討を要する。東一坊坊間東小路でも両側溝を検出したが、西側溝はその東肩のみであったが、溝心々距離で約7mと推定できる。東一坊坊間東小路東側溝は幅1.3～2.9m、深さ約0.3m、東一坊坊間東小路西側溝は推定で幅1.4m、深さ0.4mである。側溝に架かる橋として、東一坊大路西側溝にはSX218・SX314があり、東一坊坊間東小路東側溝にはSX445がある。側溝に伴う遺構としては東一坊大路西側溝の底で検出した曲物の埋設遺構SX216がある。これは大小の曲物を上下二段に据えたもので、流水を浄化して用いるためのものであろう。

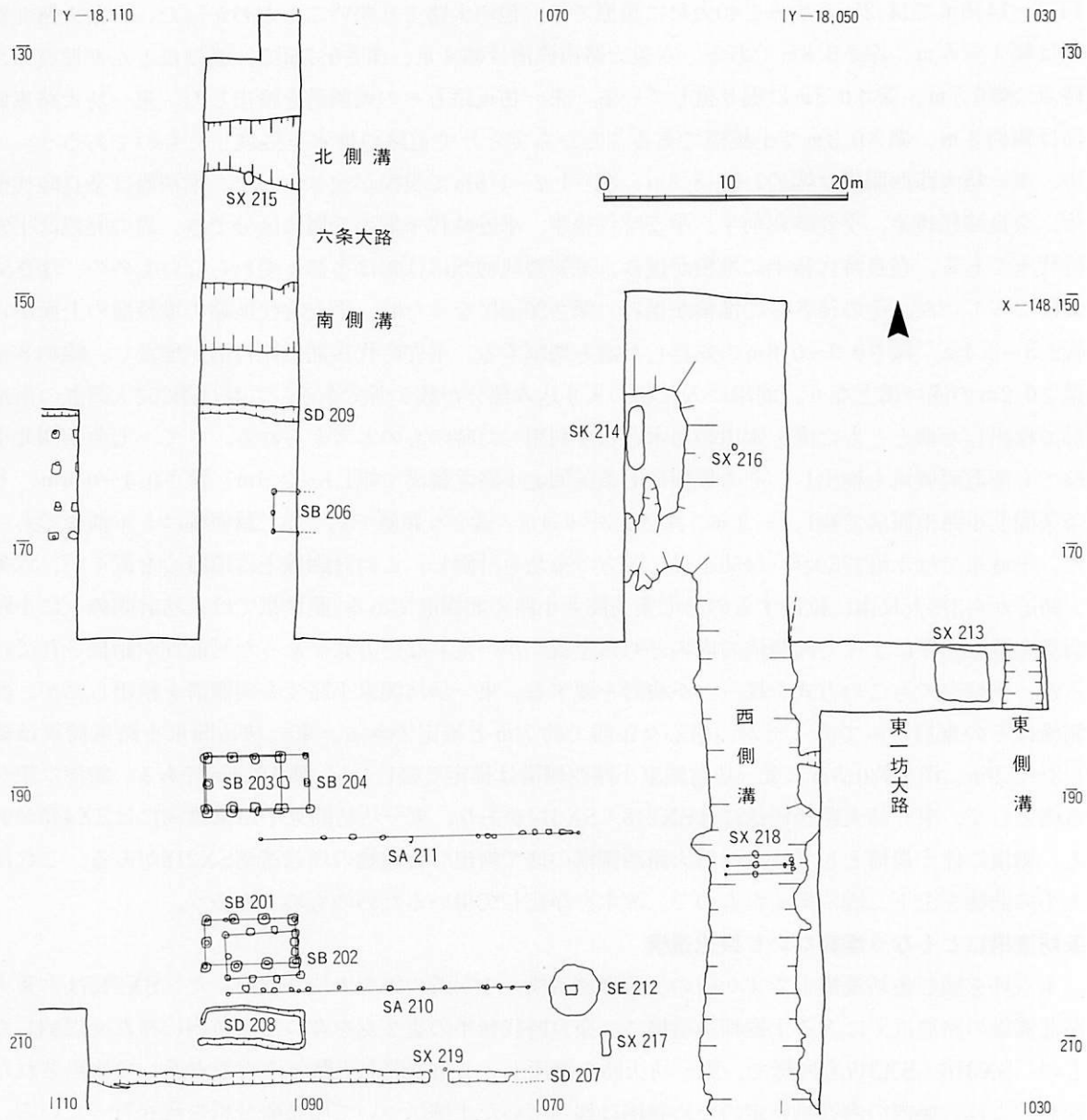
条坊遺構にともなう埋葬ないし祭祀遺構

十六坪を囲む条坊遺構上で4ケ所の土器埋納遺構、1ケ所の祭祀土坑を検出した。SX215は六条大路北側溝の路肩近くにある土器埋納遺構で、奈良時代後半の甕2点を合口で土坑内に横たえ埋納したもの。SX316・SX317も同様で、東一坊大路の路面上、七条条間北小路との交差点近くで検出された。なお、これら甕内の内容物特定のため甕内に残っていた土壌について脂肪酸分析を現在行っている。SX446は奈良時代後半の甕1点を土坑内に横たえ埋納したもので、有機質の蓋があった可能性がある。SX444は七条条間北小路南側溝底の長さ6.4m、深さ0.5mの祭祀土坑で、西側には馬の上顎2点、下顎1点、脚部などの骨が集中し、中央部に土師器甕や墨書人面土器、馬上顎1点、東側に須恵器壺、須恵器杯などが埋められていた。出土土器の年代は奈良時代前半である。

十六坪内の遺構　坪内を南北に二分する位置に東西溝SD207、東西に二分する位置にSA402がある。前者の西半部は調査区外で、後者は北半部に及ばないが、これらおよびその延長で区画される区域をここでは便宜的に東北部、東南部、西南部、西北部と呼ぶ。

東北部の様相

検出した遺構は掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、溝3条、井戸1基、土坑1基である。建物は1回の建て替えがあり、東半には建物遺構は見られない。十六坪の四周のうち、六条大路に面する北面と東一坊大路に面する東面には築地塀があったと考えられるが、削平され本体は遺存しない。SD209は六条大路の南側溝の南約5.2mにある幅0.7～1.1m、深さ0.4mの東西溝で、北面築地の南雨落溝と考えられる。埋土からは築地の崩壊土と多数の瓦片などが出土した。十六坪の南北を二分する東西溝SD207



十六坪東北部遺構平面図

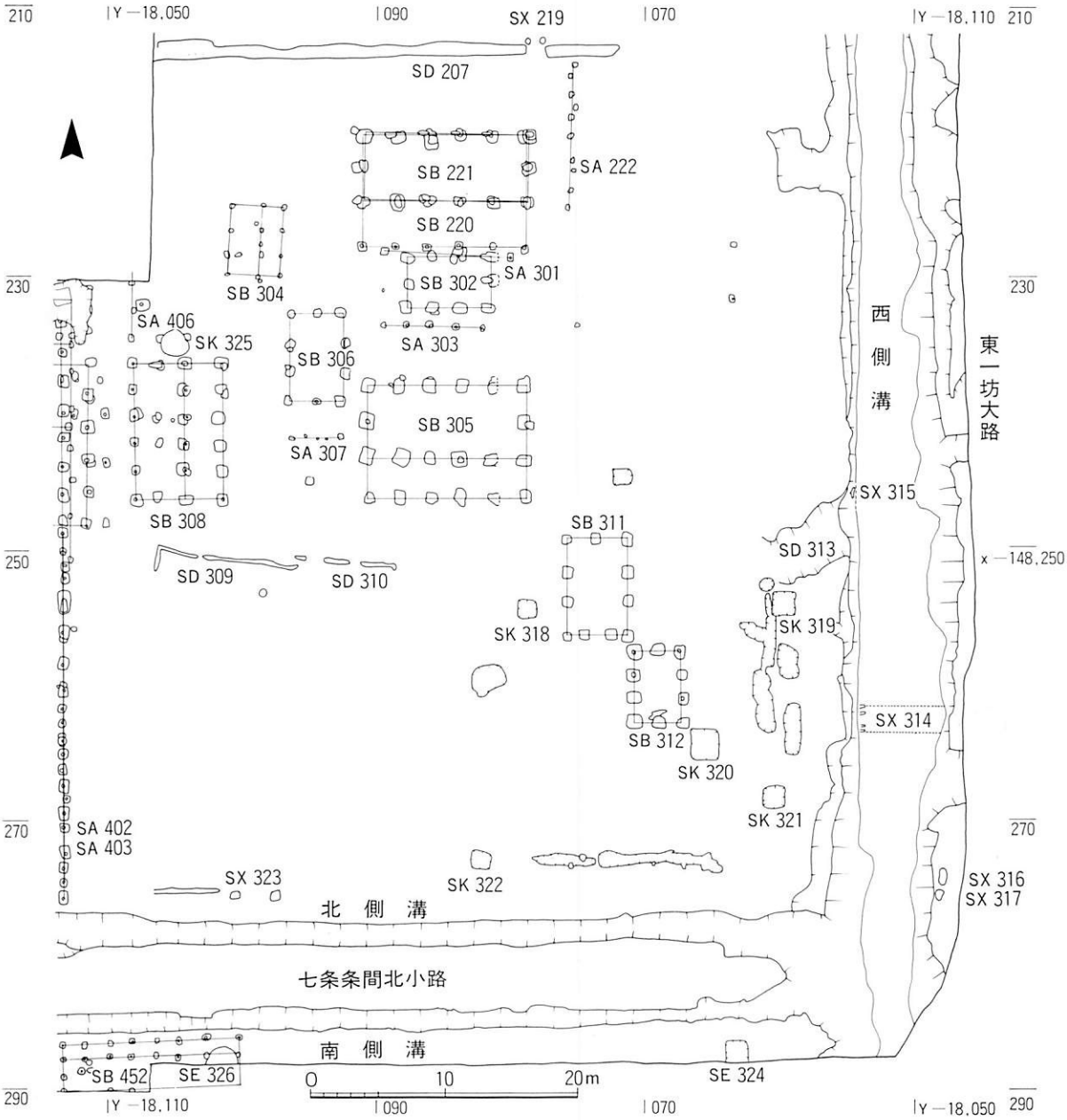
は幅約１ｍ、深さ0.2ｍで、六条大路心と七条条間北小路心とのほぼ中間に位置する。このことからこの溝は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大きい。この溝は後述する十六坪東南部の正殿SB220・SB221・SB305の東妻に対応する位置で一旦途切れ、陸橋部北側には柱穴が２個並ぶ。通用口と簡単な門であろう。掘立柱東西棟建物SB201と掘立柱東西棟建物SB203は西妻をそろえ、前者はほぼ同位置で一周り小さい掘立柱東西棟建物SB202に、後者は西妻の位置を変えず梁行が１間長い掘立柱東西棟建物SB204にそれぞれ建て替えられる。SB201の南にはロの字状を呈す東西8.6ｍ、南北3.2ｍの浅い溝SD208があり、この建物に伴う菜園の区画溝と考えられる。また掘立柱東西棟建物SB206や１辺約90cmの縦板横桟どめ方形井戸枠を伴う井戸SE212、SB201の南からSE212まで延びる掘立柱東西塀SA210などがある。他に平安時代前半の遺構として木棺墓SX217がある。掘形は長さ202cm、幅約60cm、現存深さ19cmである。木棺はそれが腐食した粘質土の範囲から長さ175cmで、下に桟を据えていた。副葬品には漆器方形箱、漆器椀、土師器椀、須恵器平瓶、ガラス玉、承和昌宝（承和２（853）年初鋳）などがあり、主要な副葬品が北端に寄せられていたことから北頭位と考えられる。

東南部の様相

東南部で検出した遺構は掘立柱建物８棟、掘立柱塀５条、土坑５基などで各建物間には敷地を区画する明瞭な施設はなく、奈良時代を通じて東南部を一体的に利用していたと考えられる。東南部、西南部、西北部では遺構の方位の振れ、重複関係、位置関係からＡ～Ｄの４期に区分でき、Ａ・Ｂ期が奈良時代前半、Ｃ・Ｄ期が奈良時代後半にあたる。

Ａ期　掘立柱東西棟建物SB305は正殿で、桁行５間、梁間２間に南廂がつく。桁行の中心が坪の南北四等分線上にあり、桁行の中心は坪の東西四等分線上にある。正殿の西にある掘立柱南北棟建物SB308は桁行５間、梁間２間に東廂がつき、南妻を正殿の南廂に揃える。正殿の東南にある掘立柱南北棟建物SB311は桁行３間、梁間２間であるが、南妻を３間に割っており中央に戸口を設けたと考えられる。SX323は七条条間北小路北側溝の北側にある２個の柱穴で、小路への出入り口であろう。

Ｂ期　Ａ期のSB305・SB308は存続し、正殿SB305の北側にその後殿となる掘立柱東西棟建物SB302



十六坪東南部遺構平面図（１：500）

を建てる。正殿の東南には掘立柱南北棟建物SB312を配する。

C期　B期の建物をすべて廃し、敷地の中央北端近く、東西四等分線上に桁行5間、梁間2間、南廂付きの掘立柱東西棟建物SB220を置く。またその南5.9mに目隠し塀SA303を設ける。さらに、坪の東西二等分線上に南北棟建物SB404（後述）を置く。

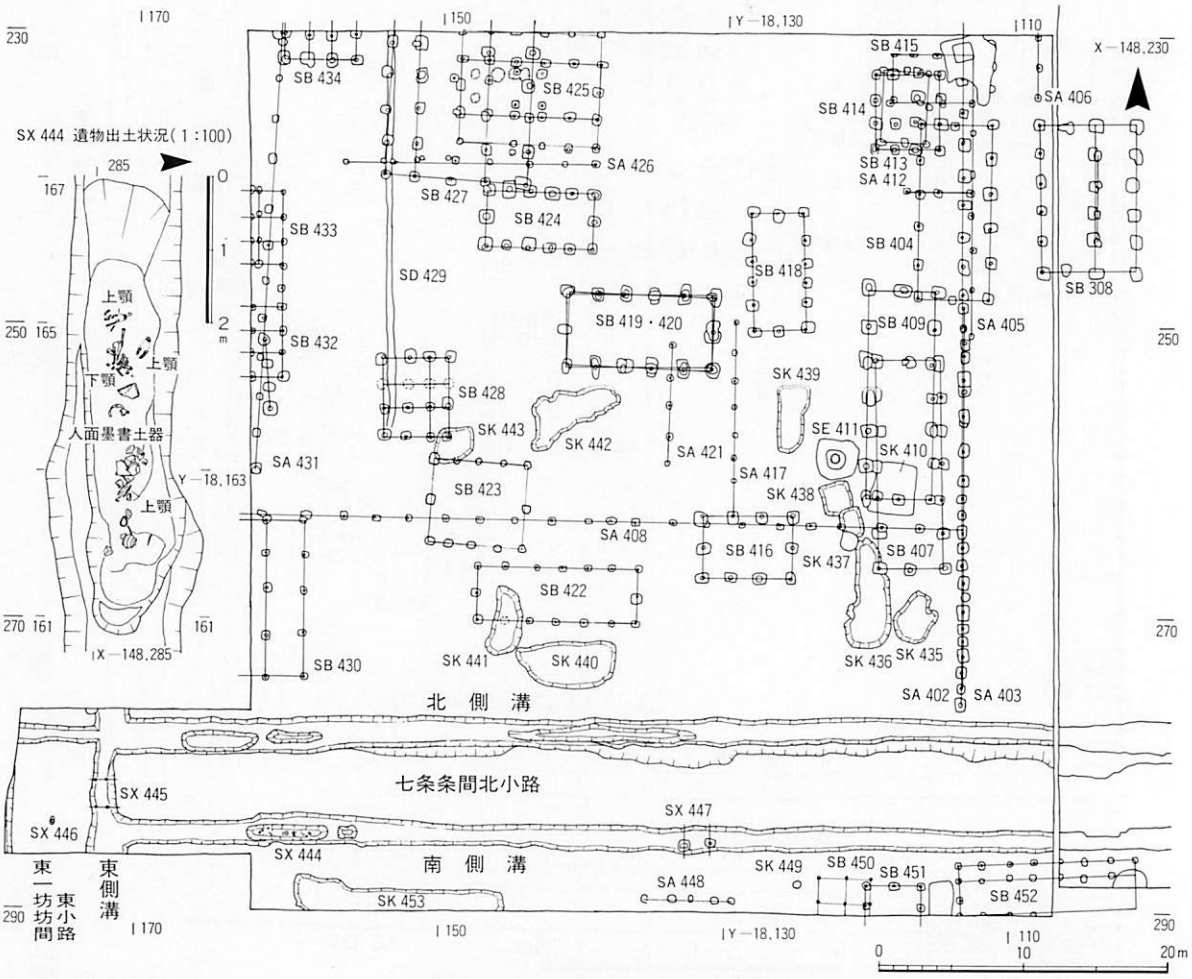
D期　SB220を廃し身舎の位置と規模を変えずに南廂のない掘立柱東西棟建物SB221に建て替える。SB221の南に掘立柱塀SA301、東に掘立柱塀SA222、南西に掘立柱南北棟建物SB306を置き、その南には掘立柱塀SA307を配する。

西南部の様相

西南部で検出した遺構は掘立柱建物20棟、掘立柱塀8条、井戸1基、溝1条、土坑多数で東北部、東南部に比べ数が多い。

A期　A期の遺構の方位は北でやや西偏する。十六坪の南半を東西に二分する掘立柱南北塀SA402が西南部の東を限る。SA402の西には桁行6間、梁間2間の掘立柱南北棟建物SB407があり、その北には柱筋を揃えた総柱の掘立柱南北棟建物SB413がある。SB407の北西には掘立柱南北棟建物SB418があり、梁行中心が坪の南北四等分線上にのる。SB428は総柱の掘立柱南北棟建物で、北妻がSB407の北妻と筋を揃える。

B期　B期の遺構の方位は北で東偏するものが多い。掘立柱南北棟建物SB409はSB407と同規模で北へ2間ずらし建て替えている。SB409の北には棟通りを揃えた掘立柱南北棟建物SB414がある。桁行5



十六坪西南部遺構平面図（1：500）

間、梁間２間に南北両廂がつく掘立柱東西棟建物SB425はその南の掘立柱東西棟建物SB424と東妻を揃えて建つ。さらに、その南には掘立柱東西棟建物SB423がSB424の桁行中心線に東妻を揃えて建つ。また、27ｍ分を検出した幅0.6ｍ、深さ0.15ｍの溝SD429は東一坊条間東小路東側溝から17.7ｍ（60尺）東にある。

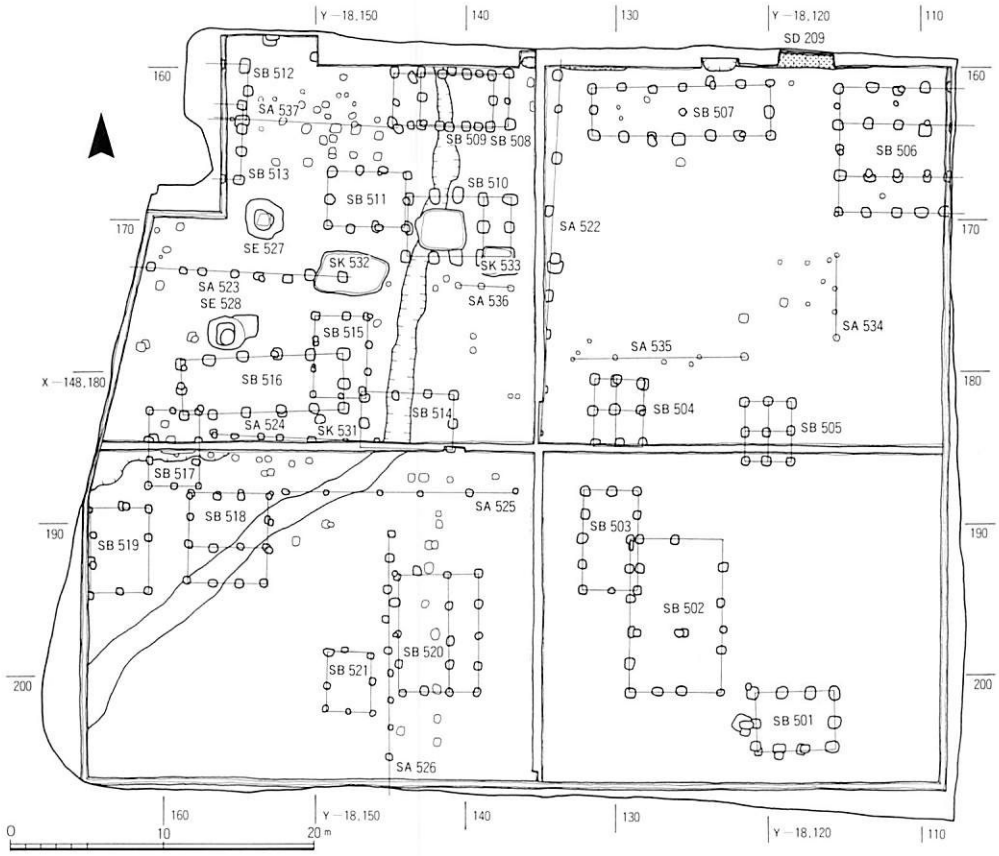
Ｃ期　Ｃ期の遺構の方位も北で東偏するものが多い。Ｂ期までのSA402を掘立柱南北塀SA403が踏襲するが、掘立柱南北棟建物SB404で止る。この塀から掘立柱東西塀SA408が西に延び、その南には掘立柱東西棟建物SB422があり、東妻をSB419の桁行中心線に揃える。東西塀の北には掘立柱東西棟建物SB419があり、その北側柱をSB404の南妻に揃える。東西両廂が付く掘立柱南北棟建物SB427はその東廂がSB404の棟通りから29.7ｍ（100尺）離れ、桁行が５間とすると桁行中心線がSB404の北妻と揃えるように配置していたと考えられる。SB427の西にはSA408の３ｍ北から北へ延びる掘立柱塀SA431がある。

Ｄ期　Ｃ期のSB419を同位置、同規模で建て替えた掘立柱東西棟建物SB420を中心として方位の振れない遺構が整然と配置される。坪の東西二等分線上ではSA403を廃し、掘立柱東西棟建物SB415の東妻から南に延びるSA405に替わる。SB420の北に掘立柱東西塀SA426、東に掘立柱南北塀SA417、さらにその南に掘立柱東西棟建物SB416掘立柱南北塀SA417があるのみで、SB420の周囲では遺構が疎である。これに対し、東一坊条間東小路に面した敷地の西辺には掘立柱南北棟建物SB430、SB432、SB433、SB434があり、敷地利用が街路寄りに変化したと考えられる。その他の遺構としては廃絶が奈良時代末で、時期が未確認の井戸SE411がある。掘形は最大径３ｍで、直径0.8ｍ・長さ1.83ｍのヒノキの大木をくり抜いた井戸枠を伴う。SK410は井戸の試掘の跡か、井戸枠を伴わず途中で放棄したものと考えられる。

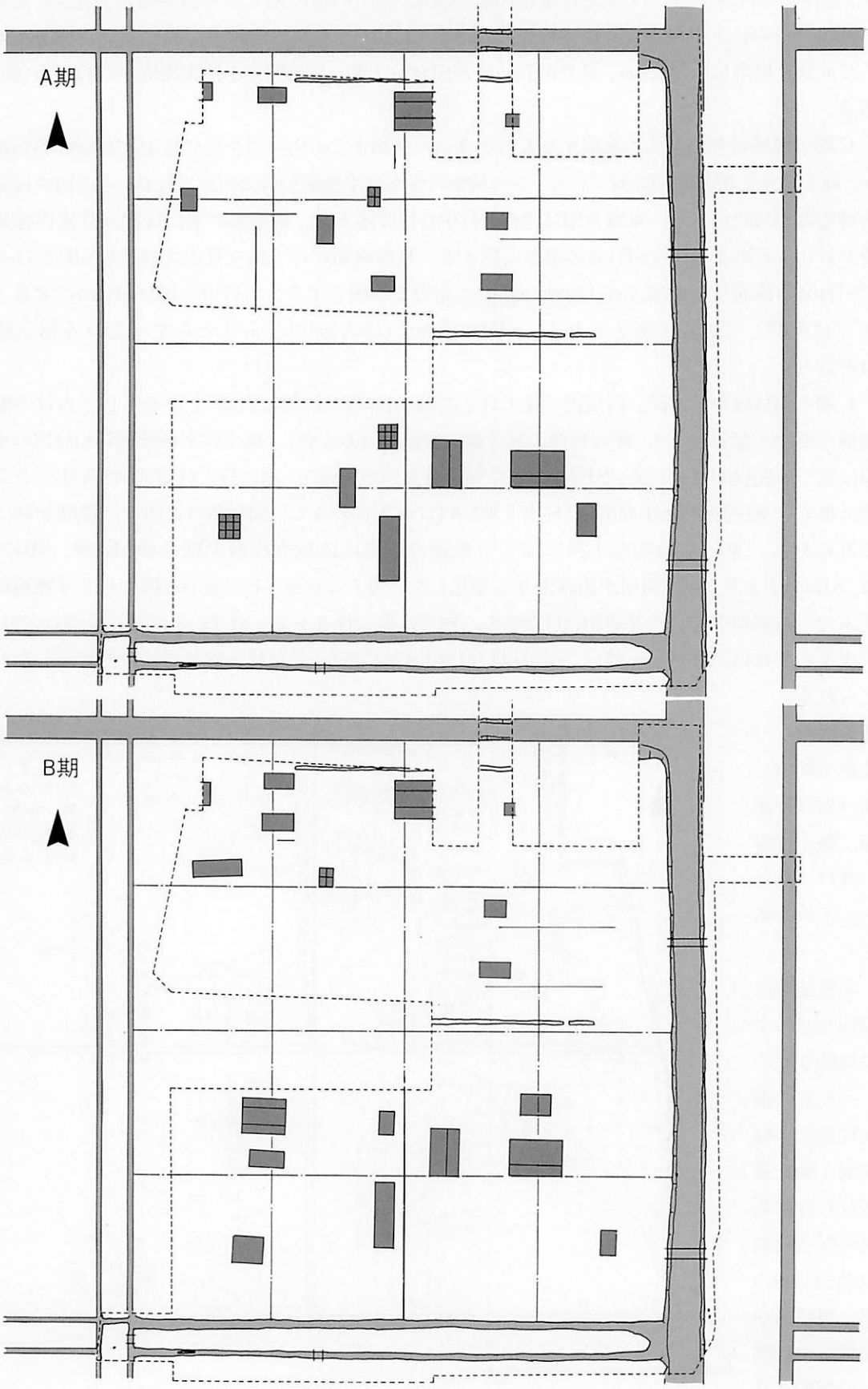
西北部の様相

西北部で検出した遺構は掘立柱建物21棟、掘立柱塀５条、井戸４基、溝４条、土坑４基である。

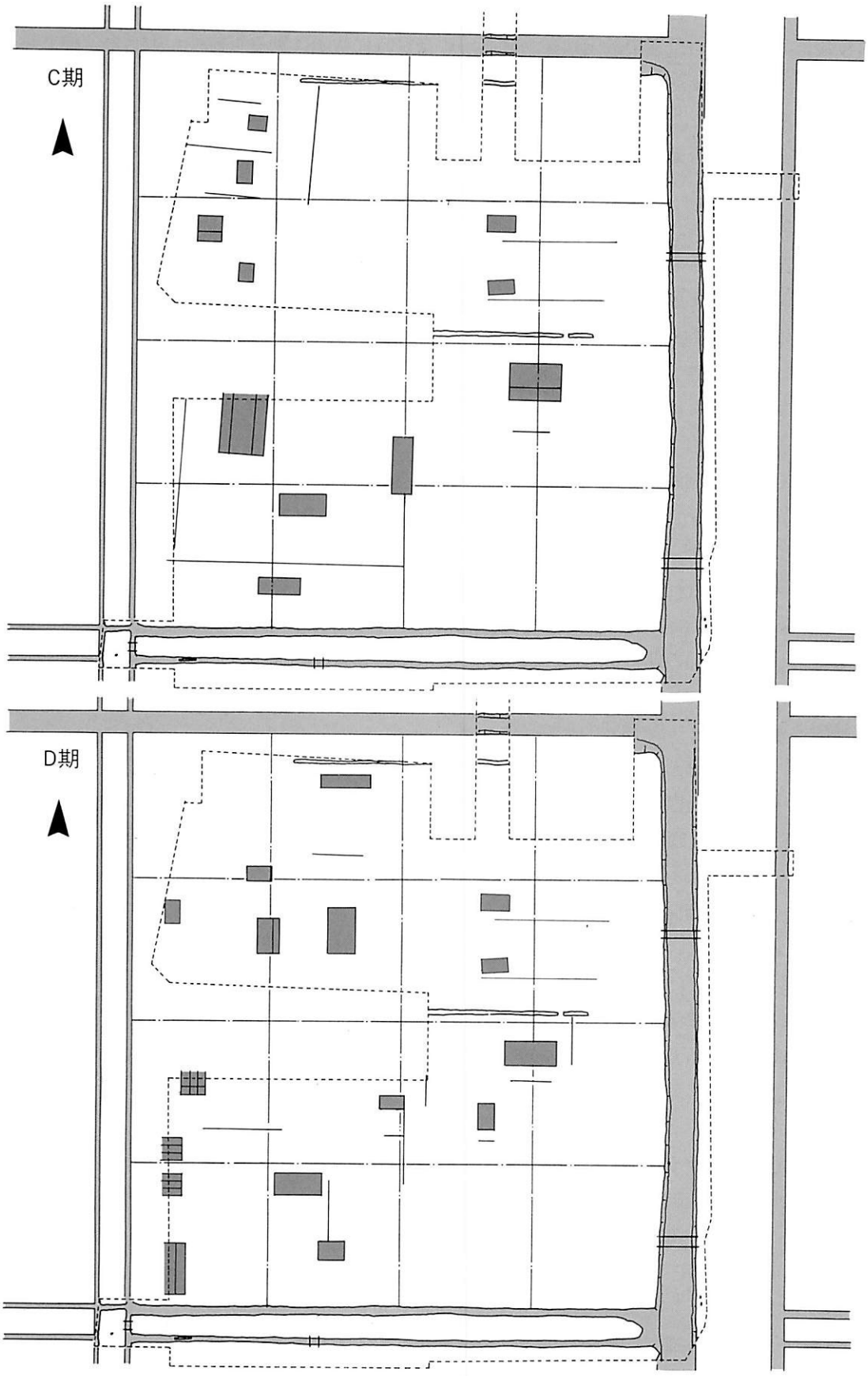
Ａ期　北面築地南雨落溝SD209のすぐ南に建物３棟を置き、それらの南に掘立柱建物４棟、掘立柱塀１条を置く。これらは南北両廂付の掘立柱東西棟建物SB506の妻柱筋、側柱筋から10尺単位の距離をとって配置されている。掘立柱東



十六坪西北部遺構平面図（１：500）



左京七条一坊十六坪遺構変遷図（上：A期、下：B期）



左京七条一坊十六坪遺構変遷図（上：C期、下：D期）

西棟建物SB506は梁行を５間とするとその中心は東一坊大路心と東一坊坊間東小路心の距離を二等分する位置にあり、この位置の設定は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大きい。掘立柱東西棟建物SB509はその西妻がSB506の西妻と44.5ｍ（150尺）離れる。掘立柱東西棟建物SB501はその東妻をSB506の西妻に揃え、北側柱がSB506の棟通りと35.6ｍ（120尺）離れる。掘立柱南北棟建物SB503は棟通りがSB506の西妻柱筋と14.9ｍ（50尺）離れ、北妻がSB506の北側柱筋と23.9ｍ（80尺）離れる。

Ｂ期　SB506は存続し、SB506の桁行中心線から29.6ｍ（100尺）西に桁行の中心を置く掘立柱東西棟建物SB510を建て、その南西に総柱の掘立柱南北棟建物SB504と掘立柱東西棟建物SB516を置く。また、SB509を掘立柱東西棟建物SB508に、SB512を掘立柱南北棟建物SB513にそれぞれ建て替える。SB508はSB510と東妻柱筋を揃える。

Ｃ期　様相が大きく変わり、遺構は北で東偏する。西北の隅を掘立柱南北塀SA522と掘立柱東西塀SA524で仕切り、さらにその中を掘立柱東西塀SA523で二分する。SA523の北側には掘立柱東西棟建物SB511を置き、南側には掘立柱南北棟建物SB515を置く。SA524の南には桁行３間、梁間２間に南廂の付く掘立柱東西棟建物SB518と掘立柱南北棟建物SB521が建つ。

Ｄ期　ふたたび様相が大きく変わり、遺構は北でわずかに西偏する。SD209沿いに掘立柱東西棟建物SB507を建て、東西塀SA535を隔てた南には桁行５間、梁間２間の掘立柱南北棟建物SB502が建ち、その棟通りをSB507の桁行中心線上に置く。SB502の西には南妻柱筋を揃えた掘立柱南北棟建物SB520が建つ。SB520の北には掘立柱東西棟建物SB514、西には掘立柱南北棟建物SB519を置く。時期が未確定な遺構としてSA523の北にある井戸SE527やこの南にある井戸SE528などがある。前者の井戸枠は下から順に、円形曲物、転用した方形木櫃、縦板15枚を上下２段の枠木で組んだ方形枠を埋設する。

十五坪内の遺構

十五坪内は幅４ｍ分しか調査していないため、時期区分は困難である。桁行７間、梁間２間に北廂が付く掘立柱東西棟建物SB452の西妻は十五坪の東西二等分線上にある。他に掘立柱南北棟建物SB450や塀SA488、土師器椀（平城Ⅱ）１点を上向きに据えていた土器埋納土坑SK449などがある。

遺物

遺物は東一坊大路西側溝からの出土が多量でその内容は多種多様であった。通常の土器（硯・製塩土器・墨書土器など）、木器（刀子柄・砧・柄杓・折敷・曲物・皿・杓子・檜扇・下駄・横櫛・留針・木印）、金属器（鉄刀子・鉄鑿・鉄族・鉄鋤先・鉄鎌・鉄釘・鉄石突・海老錠牡金物・銅帯金具・銅瓔珞）、瓦塼類のほか、祭祀関係遺物、生産関連遺物、木簡が多量にみられる。祭祀関係遺物では各種材質の祭祀具が揃っており、人面墨書土器・ミニチュア土器などの祭祀用土器・土馬、銅製人形・鉄製人形・小型素文銅鏡・銅鈴、木製人形・斎串・刀形・一本歯下駄などである。なお、口絵に人形の写真を示した。

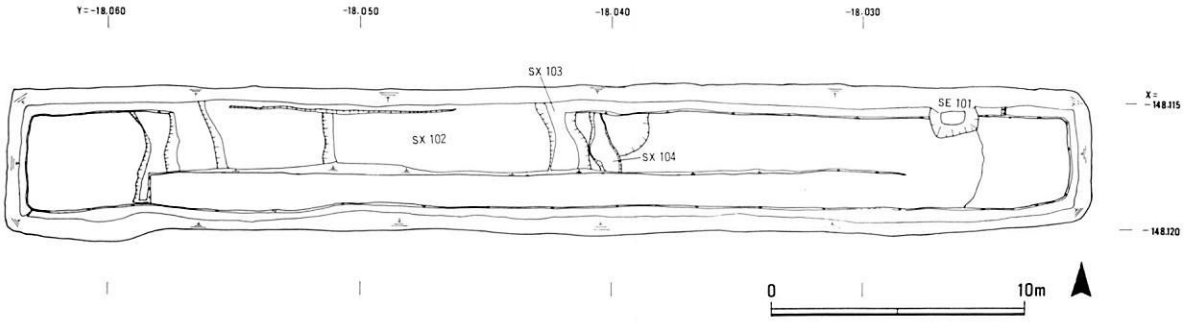
生産関連遺物ではガラス関係の坩堝・ガラス玉鋳型、金属器関係の甑炉・炉壁・鞴羽口・鉱滓・坩堝・鉛切り屑・砥石、漆関係の漆付着土器・刷毛などがある。瓦塼類では軒丸瓦6012Ｂ・6272Ｂ・6282Bb・6282Db・6285Ａ・6291Ab・6304Ｌ・6314Ａ・6345新、軒平瓦6691Ｊ・6663Ｆ・6663Ｊ・6668Ｂ・6691Ａ・6710Ａ・6716Ｃ・6721Ａ・6721Ｃ・6721Gb・薬師寺253、隅切平瓦などがある。木簡は六条大路北側溝から３点出土した以外、削屑を含めた数百点が東一坊大路西側溝からである。内容は文書・荷札・付札・習書と多様で、衛士に関連すると推定されるものや「主菜所」のような文献にみられない部署名を記す木簡などもある。これらがどこで廃棄されたのか、周辺遺構と関連があるのか等の検討が必要である。

まとめ

第252～255次調査で平城京左京七条一坊十六坪のほぼ全域の様相が明らかになった。坪の南半部ではC期に東西二等分線をまたぐSB404ができ南半部の一体性が強まるが、基本的には東西二等分線上のSA402・403の東西で遺構の配置や密度が異なり、区画して利用していたと考えられる。一方、北半部では東西二等分線上にSB506があり、北半部を東西に区画する溝・塀などの施設を検出していないことから北半部は一体的であったと考えられる。南半部と北半部では時期ごとの遺構の方位の振れの様子が異なるため、それぞれ別の敷地であったことが考えられる。しかし、坪を南北に二分するSD207には十六坪東南部の正殿SB220などの東妻に対応する位置に出入口があることから、一坪を占める敷地で用途により南北に区画していたとも考えられる。十六坪の性格については東一坊大路西側溝から官衙関係の木簡がまとまって出土したことや東一坊大路西側溝や坪の東端部から多様な生産関連遺物の出土することから官営工房の存在を推定する意見もある。しかし、建物配置は官衙的ではなく、坪内に工房があったとしても邸宅の可能性が考えられる。一町規模の敷地なら下級貴族、二分の一町なら中級官人の宅地であろう。遺物の整理を待ってさらに検討したい。なお、第252～255次調査および第251次調査については1996年度末に正式な報告を行う予定である。

左京六条・東一坊大路の調査（第251次）

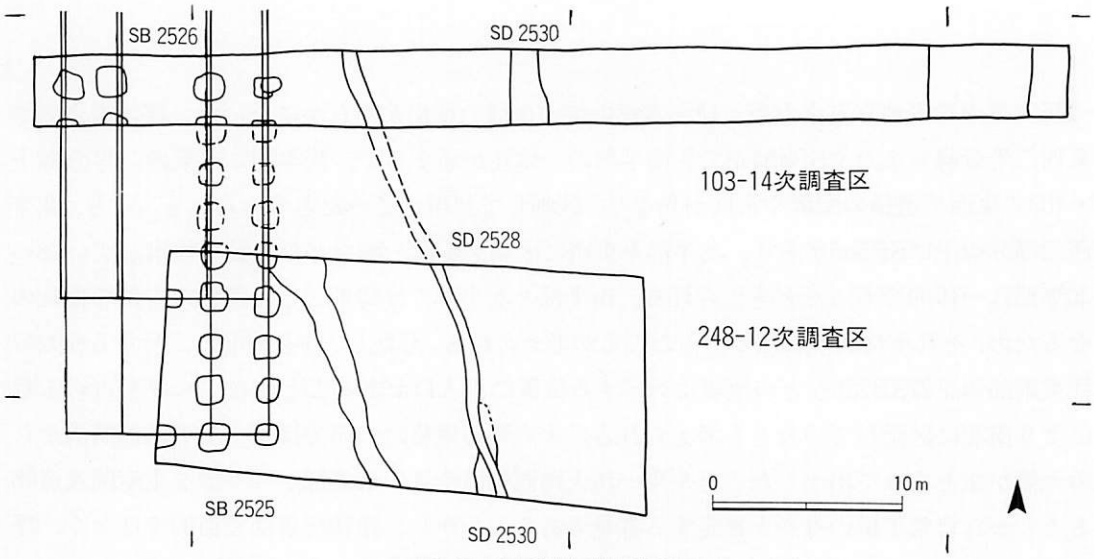
大型小売り店舗の新築に伴う事前調査で、前述の第252～255次の調査に先立ち東一坊大路の位置と規模の確認を目的とした。厚さ60～70cmの表土および耕作土の下の土層から中世の土器と巴瓦が出土した。調査区東端部ではこの土層の直下で地山が検出されたが、東端から3.2mほどの所から西側は沼状の遺構SX102となる。SX102の中央部は複雑に窪み、斜行溝状のSX103・SX104も検出した。これらの最も深いところは東端部地山面から1.2～1.3mである。また、SX102の東北隅ではこれより新しい井戸SE101を検出した。結局、この調査では目的とした東一坊大路に関わる遺構の確認はできなかった。



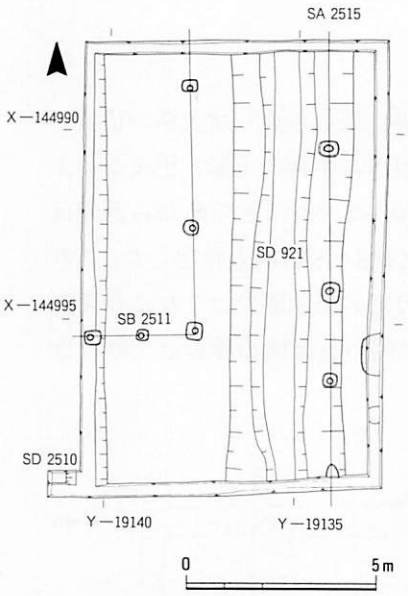
第251次調査遺構平面図（1：300）

右京一条二坊四坪の調査（第248-12次）

集合住宅建設に伴う事前調査である。調査区は平城宮の西方の西一坊大路に面し、大路の西側溝の検出を目的とした。検出した主な遺構は大型の掘立柱建物・礎石建物各1棟、溝5条である。掘立柱建物SB2525は身舎および東廂部分の桁行4間分を検出した。礎石建物SB2526は南妻部分の3個の掘形を検出し、その礎石据え付け掘形が掘立柱建物の南から4番目の掘形を切り込んでいた。礎石建物は今回調査地区の北約12mで行われた第103-14次調査でも検出しているが、この調査でも掘形が重複していたことから掘立柱建物がここまで延びていた可能性がある。このため掘立柱建物は第103-14次調査区まで続く南北8間以上の東西両廂付の南北棟で、北へ3間ずらして東西両廂付の南北棟礎石建物に建て替えられたと考えられる。SD2527・SD2529・SD2531は古墳時代の素掘溝で、SD2528は中世以降の溝と考えられる。西一坊大路の西側溝SD2530は調査地区の南側でかろうじて4m程検出した。



第248-12次調査遺構平面図（1：400）



第248-2次調査発掘遺構図（1：200）

北側では削平されて残らない。従来、本調査地区周辺では秋篠川による削平のために遺構検出例はほとんどなかったが、今回の調査によって平城宮に面する西側の土地利用を考える貴重な資料を得た。

右京一条二坊一坪の調査（第248-2次）

集合住宅建設に伴う事前調査である。調査地区は右京一条二坊一坪の東辺部にあたり、西一坊大路西側溝の確認を目的として調査地区を設定した。検出した遺構は南北溝２条、掘立柱建物１棟、掘立柱塀１条、土坑２基である。西一坊大路西側溝SD921は幅約３ｍ、深さ約0.5ｍで、堆積は上下２層に分かれる。下層埋土の堆積する溝は断面がＶ字形で一段深い。溝の西側には築地塀の痕跡はないが、掘立柱塀も存在しないため築地塀であった可能性が高く、調査地区西端の幅1.1ｍ、深さ0.2ｍの南北溝SD2510は築地の西雨落溝と考えられる。掘立柱南北塀SA2515はSD921の東肩にあり、下層埋土より新しく、柱抜取穴から奈良時代末から平安時代初頭の土師器が出土したことから上層の溝と並存すると考えられる。南北棟建物SB2511は桁行、梁行ともに３間以上で時期は不明であるが、築地想定位置に重なるため長岡京遷都以後の遺構であろう。

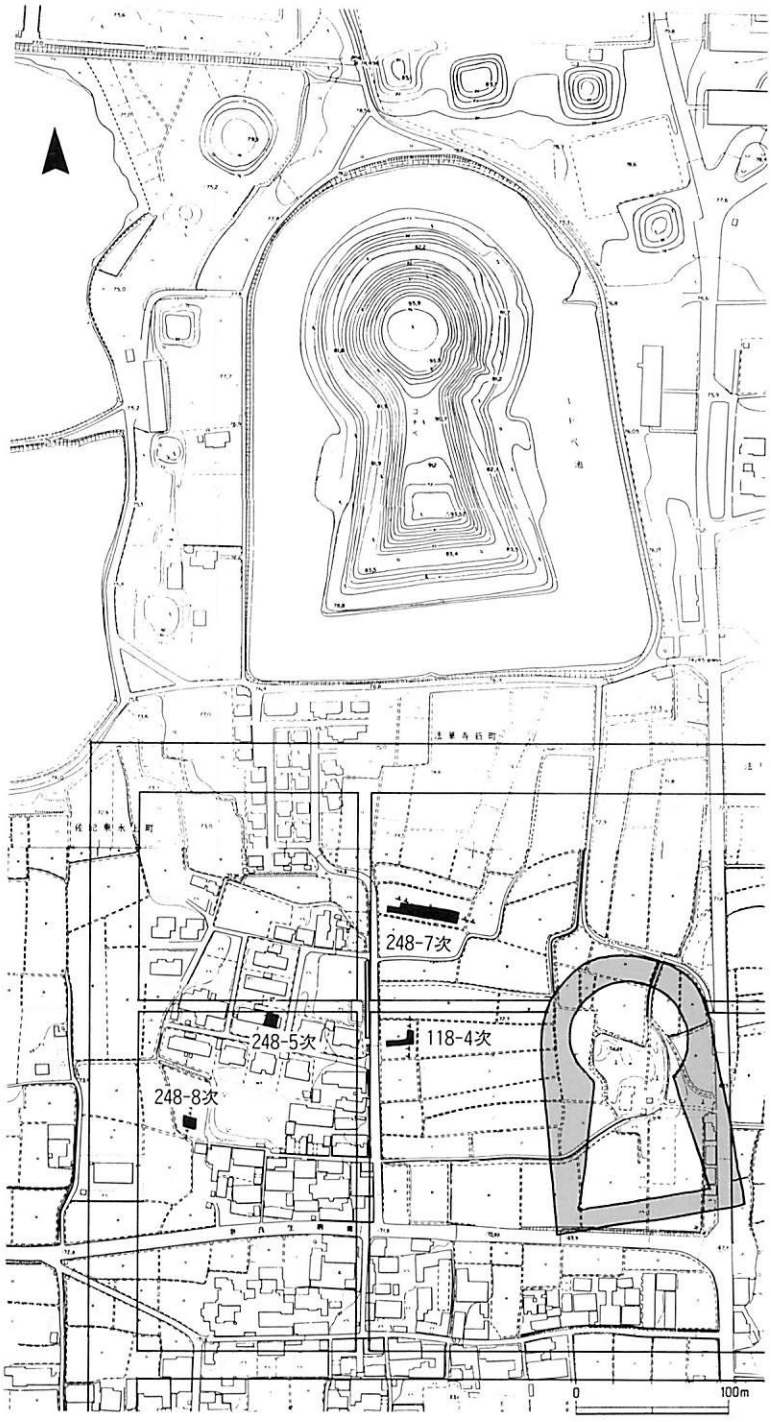
西一坊大路の調査（第248-14次）

住宅改築に伴う事前調査である。調査地区は平城宮西面中門と北門との間の大垣の西側にあたり、西一坊大路が想定され、その両側溝の確認を目的に東西２ケ所のトレンチを設けた。西トレンチ西端で西側溝と考えられる南北溝を検出したが、幅70cm、深さ20cmしか残っていなかった。一方、東トレンチでは幅5.6ｍ、深さ0.5ｍの南北溝があり、これを東側溝と判断した。今回の調査による西一坊大路の幅は溝心々距離で22.6ｍで、従来の成果とほぼ一致した。

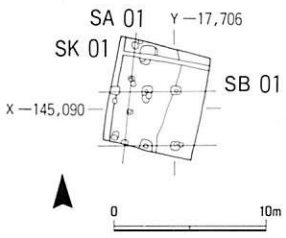
左京一条二坊十坪の調査（第248-5次）

住宅新築に伴う事前調査である。調査区は法華寺の北方で、遺存地割りから条坊道路の復原によると左京一坊二坊は不整形な地割りが考えられているが、南側の十坪と北側の九坪の間を通る東西の小路が想定されていた。６ｍ四方の調査区から遺物はほとんどなく、検出した遺構は北で東偏する南北塀SA01を３間分、東西棟建物SB01、土坑SK01等であった。従って、想定していた東西小路は検出できなかった。今回の調査で注目したいのは調査区全域にわたる遺構検出面の地盤で、遺構が人工的に

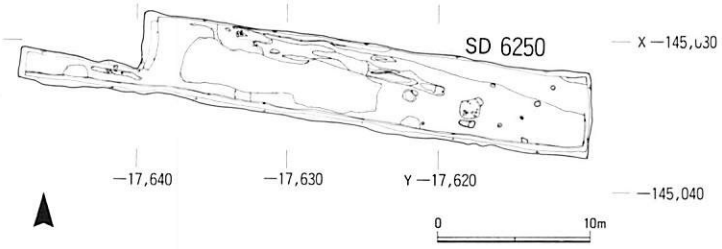
互層に積み上げられた地盤を掘り込んでいる点や土層が水平層を成す版築状ではなく傾斜をもった堆積を示す点である。この地盤を掘り込み地業と見ればSB6642は礎石建物となるが、その柱掘形は掘立柱建物の形状を示している。また、これが梁間２間の礎石建物なら掘り込み地業の北端が検出されると考えられるが、それはない。さらに、この建物が北廂付きの建物としても柱穴が見られない。従って、地盤はSB6642に伴うものではないことが明らかである。さて、ここで本調査区周辺の調査を検討してみよう。本調査区の東側の第118-4次調査で検出した70cmの掘り込み地業とされる遺構は版築状ではなく、30cm程の厚さをもつ２層に分かれるに過ぎず古墳の周濠埋立土とみることもできる。また、第248-6次調査で検出した溝に奈良時代初期の土器がまとまって捨てられていた状況は東方の木取山古墳の周濠埋立土のそれに類似する。さらに、第248-7次では確認された地山の落ちは古墳の周濠の可能性が指摘されている。このように調査区周辺の状況には削平されたいくつかの古墳の存在を推定させる要素がある。従って調査区の互層地盤はこのような古墳に伴う積土と考えられる。



コナベ古墳南方の調査位置図（１：4000）



第248-5次調査遺構平面図（1：500）



第248-7次調査遺構平面図（1：500）

左京一条二坊十六坪の調査（第248-7次）

住宅新築に伴う事前調査である。調査区の東端では現地表面下約0.7mで地山になるが、西にいくにつれ地山面は深くなり、大量の土器を含んだ整地土が厚く堆積する。中央部は近年の攪乱があり、検出した主要な遺構は東西溝SD6250の南肩のみで、溝の幅は3m以上、深さ1.2mである。この溝は東で15°南へ振れ条坊と方位が一致せず、現状の地割りなどからも北のコナベ古墳などと関連する古墳の周濠ではないかと推定される。溝の埋土は上下二層に分かれ、下層の埋土からは多量の土器と多量の炭が出土した。土器は平城宮II期に属し、坩堝や漆付きの土器を含んでいることから近辺に工房のあった可能性が指摘される。また、調査区西橋端の整地土からは出土した土器は平城宮IV～V期に属し、二彩陶器片3片を含む。大型の盤と皿の破片で、この付近が一般の宅地とは異なる性格を持っていたと考えられる。

（内田和伸）

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積（m²）	備　考	調査要因
6 ADE-H・I	平城宮　第246次	94.3.10～94.7.7	2,200	右馬寮	計画調査
6 ABA-E 6 ABB-D	平城宮　第248-1次	94.4.11～94.4.20	43	内裏北外郭北方	下水道工事
6 ABN-K	平城宮　第248-6次	94.8.19～94.9.12	54	北面大垣	下水道工事
6 ADD-L	平城宮　第248-9次	94.10.19	44	馬寮推定地	奈文研収蔵庫建設
6 ALD-G	平城宮　第248-10次	94.10.31～94.11.1	9	東院東端	個人住宅建設
6 AAG-G 6 ALS-C	平城宮　第248-13次	94.10.24～95.1.27	120	小子門・東一坊大路	宮跡内水路改修
6 AAN-C	平城京　第248-15次	95.1.18～95.1.25	82	市庭古墳	下水道工事
6 AAI-A	平城宮　第256次	94.7.1～94.7.12	140	式部省東官衙	宮跡内水路改修
6 AGA-I	平城京　第248-2次	94.6.13～94.6.28	96	右京一条一坊一坪(西一坊大路)	集合住宅建設
6 ASB-A	平城京　第248-3次	94.7.17～94.7.19	14	平城宮北方(市庭古墳)	個人住宅建設
6 AGF-H・Q	平城京　第248-4次	94.8.1～94.8.8	52	右京三条一坊(西一坊坊間路)	住宅改築
6 AFC-G	平城京　第248-5次	94.8.22～94.8.30	36	左京一条二坊十坪	個人住宅建設
6 AFC-H	平城京　第248-7次	94.9.17～94.9.30	187	左京一条二坊十六坪	集合住宅建設
6 AFC-F	平城京　第248-8次	94.10.12～94.10.20	96	左京一条二坊十坪	住宅改築
6 AGF-H・I	平城京　第248-11次	94.11.7～94.11.10	23	右京三条一坊八坪	住宅改築
6 AGA-B	平城京　第248-12次	94.11.28～94.12.26	324	右京一条二坊四坪	集合住宅建設
6 AGA-D 6 KDC-Q	平城京　第248-14次	95.1.9～95.1.13	95	平城宮西方(西一坊大路)	住宅改築
6 BSD-C	平城京　第248-16次	95.1.25～95.2.2	67	西大寺旧境内	防災工事
6 AFJ-D・E	平城京　第249次	94.4.4～94.5.23	620	左京三条一坊十四坪	共同住宅建設
6 AHC-J 6 AHD-A	平城京　第251次	94.5.31～94.6.21	225	左京六条・東一坊大路	大型小売店舗建設
6 AHC-J 6 AHD-A 6 AHH-H・I 6 AHG-Q・R	平城京　第252次	94.6.21～94.10.26	3,900	左京七条一坊十六坪	大型小売店舗建設
6 AHH-G・H 6 AHD-P・Q	平城京　第253次	94.10.13～94.12.27	3,730	左京七条一坊十五、十六坪	大型小売店舗建設
6 AHH-G・H	平城京　第254次	95.1.9～94.3.31	3,700	左京七条一坊十五、十六坪	大型小売店舗建設
6 AHH-I	平城京　第255次	95.2.21～94.3.31	2,500	左京七条一坊十六坪	大型小売店舗建設
6 BZT-A	平城京　第257次	94.11.14～95.3.31		頭塔	解体修理

1994年 平城宮・京跡発掘調査一覧